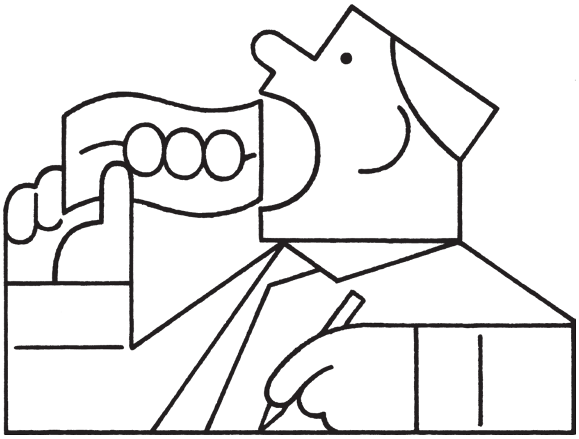

Vol.55

机の上の小さな変革

petit revolution on the desk

見立てと例え

こんにちは、菅俊一です。今回は似ているようで少し違う、ある知的操作について、実際に体験をしながら考えてもらいたいと思います。

作 業 1

目の前に紙を用意して、直径３センチほどの正円を３つ接した状態で横並びに描いてみてください。目の前に現れたその図形、あなたはどんな形に見えますか？　具体的なものに結びつけて考えてみてください。

いかがですか？　３つ並んだ正円を見ていると「だんごのようだ」と思ったり、「信号っぽいな」と思ったりと、形が類似しているものを連想して、いろいろなものに見えてきたのではないかと思います。

作 業 2

それでは続いて別のことをしていただきます。次の文章の○に該当する部分をどう埋められるか考えてみてください。○に入る文字数は自由です。

「串団子は１つずつ順番に刺していく。最初に刺したものは、最後に口の中に入ることになる。これはまるで○○のようだ」

埋めることができましたか？　結構難しかったかもしれませんが、「混んでいるエレベーターでは最後に乗った人が最初に降りる」といったような事象を連想されたのではないでしょうか。

「考える」の種類

今回みなさんには、２つのことをしていただきました。最初にしてもらったのは「見立てる」という、実際に同じ形のものを連想して具体的に結びつける行為です。次にしていただいたのは「例える」という、構造として近いものを連想し結びつけるという行為です。

どちらも２つの事象を結びつける、という意味では似ています。でも、「見立てる」場合は常に具体的な形状から考えていくため、解釈の多様性を見出すという方向になるのに対して、「例える」際には、構造という具体的な姿のないものについて類似点を見出して事例を示そうとしているため、その構造自体をどう理解するのかという方向になっていきます。

直接具体的なものを扱う場合と、抽象度高く捉えた構造から具体性を見出していく場合と、普段は頭のなかでどのような操作が行なわれているのかをまったく意識せずにしているこの２つの行為の違いは、私たちが日常的に行なっている「考える」という行為を理解するためのヒントを与えてくれます。今回のように比較しながら言語化していくことで、よりうまく「考える」技術を使いこなせるようになるかもしれません。

PROFILE 菅 俊一〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。